

第17冊・第38回（中）

『仏教抹殺』

～なぜ明治維新は寺院を破壊したのか～
鵜飼秀徳、文春新書

廃仏毀釈のインパクト

今回も、「仏教抹殺」の「廃仏毀釈」について学んでいきましょう。

「廃仏毀釈」の運動は、明治新政府の「神仏分離」政策を契機に突然勃発し、日本国中を巻き込んで寺院や仏像を破却して、わずか数年で終わってしまいました。

廃仏毀釈の機運が完全に終息するのは1876（明治9）年頃のことです。江戸時代には寺院数が**9万ヶ寺**もありましたが、廃仏毀釈によって**半分の4万5000ヶ寺**ほどになったといえます。

特に南九州では徹底的に寺院が破却されました。鹿児島県では江戸末期までには県内に寺院が1066カ寺あり、僧侶が2964人いたとの記録があります。ところが、1874（明治7）年までに寺院・僧侶ともにゼロになってしまいました。「**破却率**」は**なんと100%です**。

廃仏毀釈がおさまり、浄土真宗が特に熱心の開教（新たに寺院をつくること）活動を実施したことで、487ヶ寺まで戻っていますが、**鹿児島県は47都道府県の中では6番目に少ない寺院数**になっています。

南四国の高知県も激しい廃仏毀釈に見舞われた地域です。1870（明治3）年3月時点で613ヶ寺ありましたが、1877（明治10）年までに206ヶ寺にまで激減しました。「**破却率**」は**66%です**。

高知県といえば、四国88カ所巡り（お遍路）の舞台です。県内には16ヶ寺の霊場がありますが、内9ヶ寺が廃仏毀釈によって廃寺になっています。現在、県内寺院数は365ヶ寺まで戻っていますが、往時の約6割の水準でしかありません。

さらに、廃仏毀釈は島嶼部にも及びました。佐渡は江戸時代まで寺院数が多く539ヶ

寺を数えましたが、わずか80ヶ寺になってしまいます。「破却率」は85%です。

隠岐では、およそ106ヶ寺がゼロになりました。ここも「破却率」は100%です。島という閉鎖されたコミュニティの中で、ひとたび点火された廃仏毀釈の炎は一気に燃え上がったようです。

前回は、明治新政府が「神仏分離令」を発してすぐ、廃仏毀釈が日吉大社で始まったことをみました。

今回は、まず、明治新政府の中核である薩長両藩の様子を見ていきます。次に、奈良や京都には大寺院がありますが、どのような状況だったのかについても見ていきます。

薩摩の廃仏毀釈

明治政府の中心といえば薩摩や長州ですね。現在、薩摩つまり今の鹿児島県に寺院はどのくらいあるのでしょうか？ちなみに、隣の宮崎県ですが一部は薩摩藩に属していました。

現在の鹿児島県には、どれだけの寺院があるのでしょうか？ヒントがないと、サッパリ想像もつきませんよね。『宗教年鑑 平成27年版』にという本があるそうです。鵜飼秀徳氏によれば、鹿児島県と面積がほぼ同じの山形県で1486カ寺、広島県で1724カ寺です。

鹿児島県に存在する寺院の数は・・・487カ寺（全国42位）だそうです。隣の宮崎県の場合は・・・344カ寺。

ちなみに、日本全国で寺院数が一番多い都道府県はどこだと思いますか？4択でいきますね。考えてみてください。

- ①京都府 ②奈良県 ③東京都 ④愛知県

寺院数が全国一多いのは④愛知県で、4589ヶ寺あるそうです。京都や奈良ではないのですね。そして、全国で一番寺院数が少ないのは、沖縄県で87ヶ寺です。沖縄の場合は「本土」と歴史が異なりますから単純な比較は無理ですが。

京都や奈良の寺院数を調べてみましたら、正式に登録されているもので京都市内の神社がおよそ800、寺院がおよそ1700だそうです。日本全国の寺院の数は7万7000にのぼります。

一方、日本全国の神社の数は約8万8000ですが、神社の数が一番多い都道府県はどこでしょうか？

意外にもトップは約5000の**新潟県**です。

ちなみに、全国のコンビニの総数は約5万5000、郵便局の総数は2万4000だそうです。

さらに、『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』によれば、鹿児島国際大学名誉教授（日本史）中村明蔵氏が次のように述べられているとのこと。

「各県に『**県史**』というものがある。何十冊にもなる代物。宮崎では16年の歳月をかけ、全31巻を平成の時代に刊行。ところが鹿児島県は、昭和初期に編纂された4巻と、昭和の時代をまとめた2巻のみ、史料そのものが少ない上、**廃仏毀釈に関する関心、認識も低い。行政も県民も歴史を大切にしていない。**」

鹿児島県では「**廃仏毀釈はなかったこと**」のように扱われているといます。

では、どうして薩摩（鹿児島県）に寺院が少ないのでしょうか？寺院を破壊したのは民衆でしょうか？武士でしょうか？それとも島津のお殿様でしょうか？

まずは、『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』からみていきましょう。

華々しい、歴史の舞台裏には、悲しい史実が存在する。薩摩藩における廃仏毀釈は苛烈を極め、明治初期、寺院と僧侶が完全に消滅していたのだ。これほど広域に、寺院が完全に消滅した地域は他にない。それは、薩英戦争をきっかけにして薩摩藩が富国強兵策に舵を切り、西洋化を急ぐ余り、寺院という歴史的な価値が軽んじられた結果であった。

・・・寺院は焼き払われてそこから金属が取られ、一部は偽造通貨の精算に充てられたという。新時代の幕開けにあたり、薩摩藩は仏教を「生贖（いけにえ）」にしたのである。

.....

廃仏毀釈による史料の少なさが、公的調査の妨げになっているだけではない。鹿児島では寺院の過去帳が失われているため、個人のルーツを辿れるよすがが存在しない。鹿児島県民のアイデンティティをも失わせたのが薩摩藩における廃仏毀釈だった。

先ほど、鹿児島県にある寺院は487だと紹介しました。ところが、明治のはじめ廃仏毀釈の嵐が吹き荒れたころには、薩摩から寺院が一つ残らず取りつぶされてしまったというのです。すごいですね。続きを見てみましょう。

殿様主導の廃仏毀釈

薩摩藩における**廃仏毀釈の素地を作ったのは、第11代藩主島津斉彬（なりあきら）だ**。斉彬は身分の低かった西郷隆盛や大久保利通の才能を見出し、重用するなど幕末きっての名君として知られている。

斉彬は曾祖父である第8代藩主島津重豪（しげひで）の影響を受け、蘭学や国学に傾倒し、他藩に先駆けて産業・軍事の西洋化に努めた。反射炉や造船、大砲などを製造する**集成館事業**などを起こし、近代国家の礎を築いたことで高く評価されている。

だが、西洋化を急ぐ時流と国学・神道的なイデオロギーがあいまって、斉彬は次第に廃仏思想へと舵を切っていく。

斉彬は水戸藩による廃仏毀釈の先例に注目した。水戸藩は歴史書『大日本史』の編纂を通じて、儒学を中心に国学や史学、神道などを融合させた水戸学を生み出していた。水戸学の思想は仏教とは相いれず、寛文年間（1661～1673）には仏教寺院の破壊に着手している。特に没収した撞鐘などの金属を使って大砲や小銃などの鑄造に充てるといった実績があった。

斉彬はかなりの合理主義者であったようで、水戸藩の手法を取り入れようと考えた。南さつま市坊津町にあった興禅寺の梵鐘を取り上げて大砲にしたのが鹿兒島における廃仏の狼煙（のろし）となった。

ところが、1858（安政5年）7月に、斉彬は鶴丸城での閱兵式の最中に倒れて急死する。・・・

斉彬の没後も廃仏毀釈の機運は衰えることはなかった。その後実権を掌握した久光、そして12代藩主忠義の代にはより過激さを増していくことになる。

幕末の日本史に登場する「名君」の誉れ高いお殿様が島津斉彬です。NHK大河ドラマでもよく「登場」します。西郷隆盛が心酔していたお殿様ですね。島津斉彬も久光も、西郷隆盛も大久保利通も大河ドラマに「登場」しますが、廃仏毀釈を描いたことはないのではないのでしょうか？

島津斉彬が廃仏毀釈を主導し、彼の死後は弟である島津久光（とその子の島津忠義）の時に廃仏毀釈の嵐が吹きまわったということです。続けましょう。

1865（慶応元）年になると、いよいよ寺院の廃寺が本格化する。まず、藩内の一般寺院が破壊の対象となった。この時は島津家の菩提寺は、廃棄対象にはならなかった。

1869（明治2）年3月、**忠義の夫人の葬儀が神式で実施されたのを機に**、島津家は仏教からの離脱を正式に表明する。島津家は歴代の位牌を神式に祭り直すと、同年11月には、一乗院・福昌寺・大乘院・感應寺などの島津家ゆかりの寺院が手にかけていった。

薩摩藩では寺が消滅した後も、石仏や什器の破壊などが断続的に続いた。1876（明治9）年に鹿兒島県に「信教の自由令」が出されてようやく、破壊行為は沈静化した。他地域における廃仏毀釈は2、3年くらいで収まるところが多い。しかし薩摩藩では13年以上に渡って、徹底して廃仏が実施された。こうして藩内寺院1066カ寺すべてが消え、僧侶2964人全てが還俗させられた。

えっー、1066もの寺院すべてが無くなってしまったんですって！！僧侶も2964人すべてが還俗（げんぞく）させられたんですって！！薩摩の人々にとって寺院や僧侶って、一体何だったのでしょか？仏教を捨て去り、神道へ改宗したとでもいうのでしょか？

さらに、先ほど紹介した鹿兒島国際大学名誉教授（日本史）中村明蔵氏によれば、

鹿兒島県における廃仏毀釈の主たる目的は、寺院の梵鐘、あるいは仏像、什器などから得られる金属の徴収にあったと考えるのが妥当だ。それは軍備充実の必要性和同時に、財

政上の理由もあったようだ。その証拠に、幕末、薩摩藩は寺院から集めた金属を使って偽金作りに関わっていく。

えっ、**贋金づくり**って、どういうことでしょうか？

島津久光の子島津忠義は1862（文久2）年、当時支配下にあった琉球の支援を名目に幕府に「琉球通宝」の鑄造を願い出ています。

これに対して、江戸幕府は琉球と領内にのみ流通を限定させるという条件で、銭貨の鑄造を許可しました。ただし、琉球通宝の形状・重さ・裏書は、当時流通していた天保通宝100文と同じにすること、通用は3年を限度とすること、100万両を限度とすること、などが条件として定められました。

ところがです。薩摩藩は幕府の許可を逆手に取り、実際に琉球通宝を鑄造したのは10万両のみで、残りは密かに天保通宝の偽造に充てたのです。

そして、**薩摩藩はこの偽天保通宝を使って、軍備の拡張を凶って**いきます。このにせ天保通宝はやがて藩外に持ち出され、大坂などで流通し始めます。当然、「悪貨は良貨を駆逐する」という言葉がありますように、通貨価値は下がります。その結果インフレを引き起こし、幕末の社会は混乱を深めていったのでした。

以上の状況からわかるように、薩摩藩の廃仏毀釈は、薩摩が国学に傾倒するなどイデオロギーの影響は認められますが、**第一義的な目的は、寺院が保有する金属の徴収にあり、集めた金属で大砲などの武器を造る**ということでした。

そして、これらの結果、幕末に薩摩が「大活躍」する軍事的基盤の1つになったのでした。

ただ、薩摩藩の場合、それだけではありません。薩摩藩の全ての寺院が無くなったわけですから、島津家の菩提寺も無くなったということになります。一般庶民や武士の菩提寺も無くなり、主君の菩提寺までもが無くなってしまったのです。いや、無くしてしまったのです。

当然ですが、寺院が無くなったので、**鹿児島県には、仏教由来の国宝、国の重要文化財がひとつも存在しないそうです。**文化財の数が極めて少ないので、県の文化財関連予算規模は少ない結果、廃仏毀釈に関する調査・寺院の復元などが進まないという悪循環に陥っているそうです。

廃仏毀釈が収まり、一部の寺院が復興し、また浄土真宗が鹿児島における布教活動に力を入れたことから、現在では数の上では廃仏毀釈以前の寺院数（1066カ寺）の半分近くの水準（487カ寺）にまで回復してきました。しかし、鹿児島県では「古寺巡礼」などという言葉が聞かれることはまずない、と言います。

郷中教育の弊害？

でも、なぜ鹿児島の人々は、廃仏毀釈に抗わず、徹底的に寺院を破壊したのでしょうか？

先ほどから紹介している鹿児島国際大学名誉教授の中村明蔵氏は、そこには薩摩藩独特の権力構造があったからではないかと指摘されています。

鹿児島は伝統的に中世から武士が多かった。明治初期の鹿児島における武士率は26.4%であり、全国平均の5.7%を大きく上回っている。そこで戦国時代、島津家は「外城制度」という支配構造を構築していく。

「外城（とじょう）制度」とは、島津家の居城である「内城」に対して、武士を効率よく配置するため、領内を区分し、その拠点として外城を数多く設けるといふものだ。18世紀半ばには、113の外城が完成している。これはほぼ「一村一城」の構造であった。武士は「半農半兵」の状態地域に溶け込み、監視の目を光らせた。そのため、鹿児島ではいわゆる檀家制度がほとんど機能していない。村ごとに寺があるにはあったが、地域に入り込んだ武士の権限が大きく、寺檀関係は極めて脆弱であった。

言い換えれば、鹿児島における寺院は、「おらが村の寺」ではなかったわけである。廃仏毀釈時、檀家や民衆が寺を守る意思がみられず、無批判に寺院を廃止に追い込んだ背景に、この外城制度は無視できない。

さらに、薩摩独自の「郷中教育」が廃仏毀釈に拍車をかけたとの見方もあるようです。

「郷中教育」って何でしょう？ それは、地域ごとに先輩が後輩を指導する武家教育のシステムのことです。厳格な上下関係のもとで武芸や道徳などの教育が行われ、西郷隆盛や大久保利通は郷中教育で鍛え上げられたおかげで大成したとの評価もあります。

このように薩摩では郷中教育が普及していたことから、大衆向けの寺子屋や私塾の数が他の地方に比べて極めて少なかったのです。

明治初期までに寺子屋は全国で15000箇所ほどありました。例えば、幕末、薩摩藩と並んで近代国家を推し進めた長州藩では1304の寺子屋と106の私塾が存在していたといえます。これは、熊本、長野とともに全国トップ3に入ります。

では、薩摩藩の場合、寺子屋はどのくらいあったのでしょうか？4択で教えてください。

- ①約400 ②約200 ③約50 ④約20

答えは④です。薩摩藩の場合、なんと寺子屋はわずか19しかありませんでした。私塾はたった1つだそうです。（『日本教育史資料』）

とにかく鹿児島では、いざ廃仏毀釈になって武士が寺院の破壊を始めた時も、多くの人

が抵抗するなんてことはなかったのです。「上からの命令だから」ということで、権力に従順に従い、仏像や寺院の破壊に加担していったのです。

さらに言えば、寺子屋が少なかったことは廃仏毀釈だけでなく、その後の鹿児島県の教育の在り方にも大きな影を落としました。

1872（明治5）年、明治政府はフランス式の「学制」を定め、全国に小学校を整備していきました。小学校の校舎は**神仏分離政策によって寺院本堂や庫裏（くり）を転用していく**ケースが少なからずありました。つまり、近代の「学制」は寺子屋の流れを踏襲していると言えます。

教育学者の梅原徹は、1874（明治7）年の『文部省第2年報』より、全国の就学率を弾き出しているそうです。それによると、**就学率の全国平均は32.3%。東京では57.8%の就学率**でした。ところが**鹿児島は7.1%と全国ワースト1**だそうです。

そもそも寺子屋の少ない鹿児島県では、近代学校教育でも全国的に遅れをとることになってしまいました。残念ですね。

長州の廃仏毀釈

「明治維新の立役者」薩摩藩の様子を見てきました。では、もう一つの立役者長州藩ではどうだったのでしょうか？

『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』によれば、

長州藩は薩摩藩に比べれば、廃仏毀釈の程度はかなりマシだった。そこで実施されたのは、破壊ではなく、明治政府が意図した大々的な寺院整理であったといえる。

長州藩の廃仏毀釈は、1863（文久3）年に起きたアメリカ・イギリス・フランス・オランダとの下関戦争がきっかけとされる。下関戦争によって藩内では尊王攘夷運動が巻き起こり、神道イデオロギー興隆の機運が高まっていた。

1864（元治元）年、長州藩は全国に先んじて、神社における「権現号」などの廃止を命じている。また、同年、火葬も仏教的であるとのことから廃止になっている。

廃仏毀釈は、長州藩において江戸末期から始まっているので結構早いと言えますが、明治に入っても断続的に続いて、1874（明治7）年あたりで終息したようです。

その結果、**424カ寺が廃寺処分**となりますが、鹿児島県の半分にもなりません。つまり、長州藩での廃仏毀釈は**あくまでも政策上の廃寺処分**であり、寺院の焼き討ちなど民衆による暴動の記録はほとんどないとのことでした。

ただ、一部の「例外」があるようです。山口県内にわずかに残る破壊の痕跡が見られるのは、高杉晋作によって組織された奇兵隊と廃仏毀釈との関連遺構だそうです。奇兵隊には神官147人が入隊したという記録もあるそうです。

長州藩では薩摩藩に見られるような郷中教育はありませんでした。ですから寺子屋と私塾の数は合わせて1410もあり、全国でも群を抜く多さでした。したがって、庶民が地域の寺院と関わりが深かったと考えられます。結果的に長州藩の場合、薩摩のように大衆も加わった熱狂的な破壊行為には発展しなかったのです。

明治維新を主導した薩摩と長州ですが、廃仏毀釈に関しては随分と異なる「経験」をしたこととなります。

奈良での仏教破壊

さて、次に見ていきますのは、古都奈良における仏教破壊、廃仏毀釈の状況です。

『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』において、鶴飼秀徳氏は次のように述べています。

奈良の廃仏毀釈のキーワードは「文化財破壊」である。奈良における廃仏毀釈の波は、東大寺や法隆寺、薬師寺、西大寺、唐招提寺などにも及び、**多くの貴重な仏像が焼かれ、そして国内外に流出した。**

特に激烈を極めたのが、興福寺であった。興福寺といえば、国宝や重要文化財の宝庫のように思われているが、廃仏毀釈で相当な量の宝物、文化財が毀損された。奈良のシンボル、シカまで廃仏毀釈のターゲットにされたのである。

焚火にされた天平の仏像

奈良といえば東大寺や唐招提寺などが有名ですが、なんととっても藤原氏の氏寺であった興福寺がデカイですよ。

『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』には

興福寺は現在、境内面積2万5000坪を有する巨大寺院である。しかし、宝暦年間（1751年から1764年）に描かれた「春日興福寺境内図」を見れば、その境内規模は現在の数倍はあったと推定できる。**現在の奈良国立博物館、奈良県庁、奈良地方裁判所、奈良ホテルは、みな、もとの興福寺の寺領に建てられているのだ。**

戦国時代から江戸時代にかけては、興福寺・春日大社合一の知行地（支配権が及んだ土地）は2万1000余石と定められた。当時、興福寺は大乗院・一乗院を筆頭に、末寺計107寺を抱えていた。

興福寺は、歴史的に春日大社と縁が深かった。平安時代、本地垂迹説に基づき、興福寺は春日大社を支配下に収めている。鎌倉時代に入ると、大和国の守護の任に当たるなど、興福寺の権限は更に強大なものになっていった。

ところが、1868（慶応4）年4月7日、大和国鎮撫（ちんぷ）総督府より春日大社における権現などの神号の廃止命令が出る。折しも6日前の4月1日、奈良からも近い滋賀の日吉大社で神官たちによる暴動が勃発し、仏像や経典などが燃やされるなどの大規模な廃仏毀釈が起きていた。興福寺にとって、日吉大社の廃仏毀釈は決して「対岸の火事」ではなく、「いつ何時自分たちも同じ目にあうかもしれない」との恐怖を抱いていたに違いない。興福寺の見極めと対処は驚くほど早かった。

4月13日、塔頭（たちちゅう）の大乗院・一乗院が、連名で鎮撫総督宛に「復飾（ふくしょく＝還俗）願」を提出する。当局からの命令が出される前に、先手を打ったのである。

復飾願の文言には次のような趣旨のものが書かれていました。

歴史的には興福寺は春日大社と深い関係にあり、社殿の造営から儀式、管理に至るまで差配してきました。とくに大乗院と一乗院は交代で別当職を務めてきました。しかしながら、このたびの神仏分離の政府方針を受けて、率先して還俗することとします。そこで、改めて春日大社の神主として奉職させて頂き、勤王の道を第一として、尽力させていただく・・・

この復飾願の文言を見て、あなたはどのように思いますか？

ほとんどの末寺を出し抜いて、この大乗院と一条院の二院が独断で還俗の方針を決め、「御上に逆らわないので、神職としての地位を保証してほしい」と懇願しています。あきれるというか厚顔無恥というか、**仏教者としての矜持（きょうじ＝プライド・自尊心・自負心などを意味する）が全く感じられません。**

この申し出に対して神祇局は、還俗を許可するとともに、興福寺の僧侶に対して「新宮司」の地位を与えました。そして、春日大社に納められていた仏具類は、全て興福寺が引き取るように命じ、完全に神仏を分離させたのです。

こうして**興福寺から130人全ての僧侶がいなくなり**、広大な境内地と七堂伽藍だけが残されました。問題は興福寺のその後の処理です。

結論から言えば、多くの堂塔は破却処分となりました。『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』でその様子を見て行きましょう。

古者たちの談話や当時の資料などを集めた『漫談明治初年』によれば、金堂は警察の屯所となり、冬場になると凍えるような堂内で警官たちは焚き火をして暖を取ったという。薪がなくなれば、堂内に安置してあった**天平時代の仏像を引きずり出し、あたかも薪割りのように仏像を破り裂いて火中にくべた**というのである。

その中には貴重な干体仏も含まれていた。後年になって、焼却を免れた一部の干体仏が発見されたが、無残にも両手や足先、台座のないものが多く、暖炉にくべる薪の束のように数十体ずつにまとめて縛られていたという。焼かれずに済んだ一部の干体仏は、民間に流出し現在、藤田美術館（大阪）や MIHO MUSEUM（滋賀県）が所蔵している。

他にも興福寺の文化財の多くが、国内外へ流出した。例えば快慶作の木造弥勒菩薩立像がボストン美術館に、乾漆梵天・帝釈天立像がアジア美術館（サンフランシスコ）に、康円作の木造文殊菩薩・侍者像（重要文化財）が東京国立博物館に、定慶作の木造帝釈天立像が根津美術館（東京）に流れるなどした。美術館で開催される仏像展などで「興福寺展」としながらも、別の美術館が保有していたり、個人蔵となったりするものは、廃仏毀釈をきっかけに流出した可能性が高い。これは、他の寺院の文化財においても同様である。

ここでマイナー？な質問をしましょう。現在、興福寺が所有する国宝の仏像は何体でしょうか？重要文化財は何体あるのでしょうか？わかりますか？

ヒントですが、ちなみに重要文化財の仏像は17体だそうです。では、国宝の仏像は？下記から正しいものを1つ教えてください。

- ①12体 ②22体 ③32体 ④42体

いかがでしょうか？正解は③の32体でした。なんと重要文化財よりも国宝の方が圧倒的に多い（重文のほぼ倍）のですね。

もし、廃仏毀釈がなければ、国宝にしても重要文化財にしても数倍になったことでしょう。興福寺に残る国宝仏32体、重要文化財の仏像17体は、廃仏毀釈の嵐を逃れ、同時に残り続けることができた幸運なごく一部の仏像たちなのです。

教科書にも載っている阿修羅像（乾漆八部衆立像）や運慶が制作に関わったとされる無着・世親像などがそれなんです。

実は、それらの仏像も金堂内陣の片隅に、無造作に放置されていたそうです。あまりに粗雑に扱われた結果、阿修羅像の腕二本が抜け落ちてしまったという説も伝えられています（廃仏毀釈との因果関係は検証されていないそうですが）。

そして、燃料にできないような金属製の仏具は売り払われ、溶かされていきました。

五重塔が10万円？！

興福寺といえば、五重塔が有名ですね。もちろん国宝です。730（天平2）年に聖武天皇の后である光明皇后の発願によって建てられました。この由緒ある五重塔も破壊されるどころでした。

実は、**興福寺五重塔は五回焼失しました。現在の五重塔は室町時代に再建されたものです。高さ約50m、京都東寺の五重塔（高さ約55m）について国内では2番目に高い立派な塔です。**

しかし、規模が大きいため解体費用がかかるということで、民間に売却されました。その**金額は25円（諸説あります）**。当時の1円は現在の価値で2000円から4000円と推定されるので、多くても**10万円程度**です。国宝興福寺五重塔がタダ同然の金額で売り払われたのです。

なんと、日本を代表する仏教建築物がたったの10万円で買えるのです。いかに当時の日本が「狂ってる」「異常である」かがわかりますよね。10万円なら私でも買えます。ただし、維持費が高つつきますが。

五重塔の買い手は、塔を大切に守るつもりは全くなく、塔の頭に使われていた金属が欲しかっただけです。塔の頂上に綱をかけて万力で引き出そうとしましたが、びくともしないので、火を放てば安易に金属を採取できると考えました。

買い手は、塔の周囲に芝を積んだ上で、近隣住民に「塔を焼くから、火元に気をつけよ」という知らせを出したといいます。

でも**この告知を出したことで、周辺に類焼する可能性があるとして、住民の反発を受けて頓挫してしまいます**。黙って実行していたら目論見は成功したでしょうが、告知が「あだ」となったのです。



興福寺五重塔

結局、足場を組んで解体する費用などが捻出できなかったことで、**五重塔はかろうじて破却を免れました**。あー、良かった良かった。

ちなみに、1872（明治5）年には、興福寺の大半の境内地が上知されます。翌1873（明治6）年には塔頭寺院を含めて、多くの建造物は打ちこわしになり、興福寺は事実上の廃寺となってしまいました。

その後、**大乗院跡には奈良ホテル**が、そして**一乗院跡地には裁判所**が建設されました。この上知令については別途触れる予定です。

1875（明治8）年、旧興福寺は西大寺の管理下に置かれ、嘆願により興福寺の再興の許可が下りたのは1881（明治14）年のことでした。

すき焼きにされた神の使い「鹿」

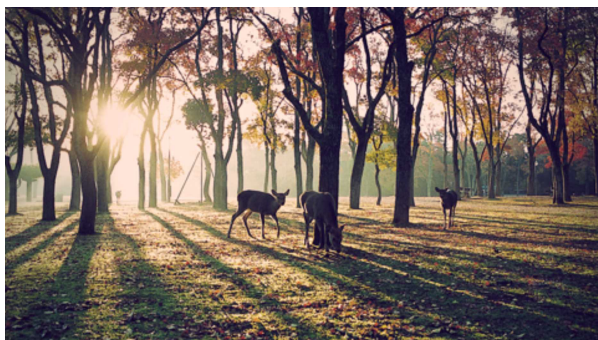
奈良といえば、あなたは何を思い出しますか？

大きな東大寺大仏殿や南大門（運慶や快慶が造った金剛力士像）などの建造物でしょうか？「山焼き」で有名で奈良市内を一望する若草山でしょうか？

私は、なんといっても奈良公園を自由気ままに散歩したり寝そべったりしたり、観光客から「鹿せんべい」をもらって食べている国の天然記念物の鹿を思い出します。

現在、奈良公園を中心に生息している野生の鹿は1200頭ほどだそうです。安芸の宮島にも野生の鹿がいますが、奈良の方が数は多いようです。

宮島にしても、奈良公園にしても、人間が生活する空間に野生の鹿が共存しているというのは珍しいですね。この鹿はなぜ奈良にいますのでしょうか？鹿の意味は何なのでしょうか？



写真は奈良市観光協会
サイトより

[奈良市観光協会サイト](https://narashikanko.or.jp/feature/deer/)に「奈良の鹿 4つの豆知識」という記事が掲載されています。
(<https://narashikanko.or.jp/feature/deer/>) そこから紹介させていただきます。

1. なぜ奈良公園には鹿がたくさんいるのか？

広大な敷地を持つ奈良公園の一部は春日大社の境内でもあります。その春日大社の祭神、武甕槌命（タケミカツチノミコト）は鹿島神社（茨城県）から神鹿に乗ってやってきたと伝わるため、鹿は神の使いとして古くから手厚く保護されてきました。現在も奈良の鹿は天然記念物として大切に保護されています。

768（神護景雲2）年、この地に春日大社が創建されましたが、その時、春日大社の祭神である武甕槌命（タケミカツチノミコト）が鹿に乗ってやってきたと伝えられ、以後、鹿は神の使いであるとして手厚く保護されてきたということなんですね。

2. 奈良の鹿は何を食べているのか？

「鹿せんべい」が有名ですが、奈良公園の鹿は野生動物ですので、もちろん自分たちでエサを見つけます。食性は1年を通じて、芝、ススキ、他のイネ科やカヤツリグサ科の植物が占めています。食性の内容により、奈良公園の平坦地に生活する「公園シカ」と「若草山のシカ」の2タイプに分けられますが、両タイプ共、芝を最も重要なエサとしています。このように芝に強く依存する点で、他地域の野生の日本シカと大きく異なります。

3. 鹿せんべいの原料とは？

芝を主要なエサとしている奈良の鹿ですが、鹿せんべいの原料は何なのでしょう。答えは小麦粉と米ぬか。鹿の健康を考えて砂糖などは一切使用していないため、安心して鹿に与えられるおやつです。鹿せんべいは一般財団法人奈良の鹿愛護会の登録商標で売り上げの一部が鹿の保護に充てられています。

4. 鹿にまつわる年中行事「鹿寄せ」「角きり」とは？

「鹿寄せ」とは鹿にまつわる伝統行事のひとつで、ホルンの音色で鹿を呼び寄せる古都奈良の風物詩です。1862年、鹿園竣工奉告祭でラッパを使って行われたのが始まりで、毎年、春日大社参道南側の飛火野と呼ばれる場所で複数回行われています。ナチュラルホルンを吹き始めると、その音色に誘われ、森の奥からたくさんの鹿たちが集まってくれます。奈良でしか見られないのどかな風景。さわやかな朝の澄んだ空気に包まれるのどかな光景を是非体感してみてください。

「角きり」とは、古都・奈良の秋を彩る勇壮な「鹿の角きり」は、江戸時代に危険防止と樹木の保護のために始まりました。雄鹿にとって大切なシンボルでもある角を切られるのはとても残念なことですが、人との共生の歴史の中で生まれた奈良ならではの伝統行事です。



「角きり」
写真は奈良市観光協会
サイトより

なお、このサイトで初めて知ったのですが、「**鹿苑（ろくえん）**」という施設があるそうです。これも**奈良市観光協会サイト**から紹介しておきますね。

「**鹿苑**」とは春日大社の石燈籠の並ぶ参道の南側に位置する**鹿の保護施設**です。毎年4月から妊娠しているお母さん鹿を「鹿苑」に保護し(約200頭)、赤ちゃん鹿がお母さん鹿と一緒に行動できるようになる7月中旬までの期間中に、特別イベント「子鹿公開」を開催し、可愛らしい子鹿を公開しています。10月には「鹿の角きり」が行われます。鹿の事が詳しく分かる資料展示室もあり、おもに学校団体を対象として奈良の鹿について学べる体験プログラムも実施しています。

ここまで奈良公園に生息する鹿のことを引っ張ってきたのは、この「神の使い」である「鹿」が、廃仏毀釈のあおりを受けて「すき焼き」にされて食べられてしまったという事実を知っておいてほしいからです。

今でこそ、奈良の鹿は現地の人々や観光客にも慣れて安全に暮らしていますが、明治維新の頃には「廃仏毀釈」の嵐に飲み込まれ、多くの鹿が「受難」を受けたのです。「犬も歩けば棒に当たる」ということわざがありますが、「鹿も歩けば棒に当たる」となり、犬のように鹿も殺され、食べられてしまったのです。

この点について、**鶴飼秀徳氏**は著書『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』のなかで、以下のように述べておられます。

奈良の鹿が人に慣れ、安全に暮らしているのは春日大社という大樹に寄り添ってきてからなのである。

一般社団法人東京奈良県人会によれば、中世以降1000年以上にわたって、およそ500から1000頭のシカが保護され続けてきたという。その間、春日大社は神仏習合の期間が長かった。

鎌倉時代に描かれた「春日鹿曼荼羅」（奈良国立博物館蔵）のシカの描かれ方は、実に仏教的である。雲の上に神々しいシカがおり、その背中に突き立てられた榊の枝先に、5体の仏菩薩が浮かび上がっている。この仏菩薩は春日大社の祭神の本地仏という位置付けだ。つまり、奈良のシカは「**仏の使い**」の要素の方が濃かったといえよう。

シカは興福寺の広大な境内に野生し、興福寺もシカを手厚く保護した。興福寺や春日大社のシカに対する神格化は著しく、時にシカを殺（あや）めた市民が死罪になることもあったという。

しかし、明治初期の廃仏毀釈によって興福寺が著しく荒廃すると、シカを保護する気運

が失われた。第一代県令である四条隆平は、シカは神仏の使いであるとの迷信を払拭するため、シカ狩りを行った。シカはすき焼きにされて食べられ、一時期、絶滅の危機に瀕するほどに頭数を減らしたという。

うーん、鹿には何の罪もないのに、可哀想ですよ。今の日本なら「動物愛護条例」などで保護されていますが、明治維新の時には容赦なく仏教にかかわるものは何でも「抹殺」されてしまう風潮だったんですね。

京都での仏教破壊

古都奈良の次に取り上げるのが、「千年の都」京都です。京都には今でもたくさんの寺や神社が存在します。観光客のお目当ても寺社のたたずまいやその中におわす仏様や神様に会い、そして庭園を見て癒されたいということでしょう。

しかし、その千年の都も廃仏毀釈からは逃れられませんでした。多くの寺に被害が及びました。わが京都の「廃仏毀釈」がどのようなものだったのか？そして、その結果京都がどのように変貌したのかを、鶴飼秀徳氏の『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』で詳しく見ていきましょう。

送り火・地蔵盆も禁止

京都といえば、あなたは何をイメージしますか？お寺や神社ですか？祇園祭や時代祭、葵祭などの「イベント」でしょうか？あるいは京料理でしょうか？東山や嵐山といった街並みや風景でしょうか？

京都にやってくる観光客は2008年に初めて5000万人を超えました。それからずっと5000万人を維持し、**ピークが5684万人の2015年**です。コロナ禍で外国人はもとより日本人観光客も減少していますので、この2年ほどは5000万人を割ってしまっているのは確実でしょう。

それだけの観光客がお目当てにしているものの1つが「京都五山の送り火」ではないでしょうか？真夏に行われ、町内の子供たちが集う「地蔵盆」も京都の特徴です。

ところがです。「送り火」も「地蔵盆」なども一時期、京都から消えてしまったのです。なぜなら、これらは「仏教的」だからです。「近代化」とは真逆だと考えられたのです。

しかも、明治ということは、「千年の都」だった京都が東京に遷都されたことによって衰退の一途をたどることになってしまいます。「廃仏毀釈」の嵐が吹き荒れることで、多くの文化財、特に仏教文化を失うことになってしまいます。

一方、「廃仏毀釈」によって得た金属などを使って「新しい施設」が登場します。

そのあたりのことを、『[仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか](#)』で見ていきましょう。

京都・鴨川に架かる四條大橋。例年8月16日、橋の上はお盆の「[五山の送り火](#)」を鑑賞する浴衣姿の人々でごった返す。ここからは見通しがきくので、送り火鑑賞の名所になっているのだ。

お盆は先祖の霊をこの世に迎え、回向をする仏教行事だ。この時期、仏壇の前に精霊棚を設け、死者がこの世とあの世を往復するための乗り物「ナスの牛」や「キュウリの馬」を用意し、菩提寺の和尚を自宅に招き、仏壇の前で経を唱えてもらう。同時に、自分達も墓詣りをする。そして、お盆の明けには「送り火」や「灯籠流し」をもって、ご先祖様をあの世に送り届けるのである。.....

1871（明治4）年10月、京都府は次のような府令を出す。.....

この府令は、京都市内の各町内の路傍における地蔵や大日如来像などは無益で、怪しく、人を惑わすものであるから、早々に撤去するようにと命じたものである。仮に靈験あらたかな仏像であるならば、路傍に乱暴に置かずにきちんと祀るのがよかろうと、一方的な見解も示し、但し書きには、地蔵堂などは売却し、得た金銭は小学校に寄付せよとある。

実際、この府令によって、今日の市内の路傍の石像がかなり撤去されたようだ。当時二条城に火の見櫓を建設する際の台座は、地蔵を集めて作られ、また、小学校の柱石に地蔵が使われるケースもあったという。

続けて、京都府は1872（明治5）年7月8日に次の法令を出している。.....

「夏のむし暑いさなか、地蔵盆などで地域住民が集まって飲食しては、食中毒になりかねない。送り火と称して無駄な焚き火をし、他の仏事も全く科学的根拠のない迷信だから今後は一切、禁止にする」という内容である。徹底した仏事への嫌悪を感じさせる府令である。

この府令によって五山の送り火、地蔵盆、盆踊りなどのお盆の諸行事が禁止に追い込まれたのだ。それどころか、正月の門松、施餓鬼、3月のひな祭り、5月の端午の節句、7月の七夕なども「仏教的な民間信仰」とのことで御法度になったという。送り火の禁止措置は1882（明治15）年まで続く。しかし、京都の夏の一大イベント、送り火を謹慎するとはよほどのことでやる。どういう背景があったのか。

たしかに送り火の場合、神仏混淆の要素が見られる。例えば、右京区嵯峨鳥居本の曼荼羅山で灯される「鳥居形」。送り火は仏教行事のはずなのに、神社を象徴する鳥居が灯されるのである。明らかに神仏が習合している。

鳥居形の送り火の由来については諸説ある。地元鳥居元は京都市内最高峰の愛宕山（924m）へと繋がる参道にある。曼陀羅山の麓には、愛宕神社へと続く「一の鳥居」があって、その一の鳥居を模したのではないかという説が有力である。

実際、愛宕神社自体が、江戸時代までは完全に神仏習合した宗教施設であった。京都の愛宕神社は全国に900を超える愛宕神社の総本宮である。創設は大正年間（701～704）で、修験道を始めた役行者（えんのぎょうじゃ）が開いたと伝えられている。781（天応元）年に勅命を受けた和氣清麻呂が境内地に白雲寺を建立する。そして、神仏総じて「愛宕大権現」の名称で、神仏習合の修験道場になっていく。

江戸末期までには境内に勝地院、教学院、大善院、威徳院、福寿院などの坊が立ち並び一大聖地となり、多くの社僧が住した。東の比叡山延暦寺に対して、西の愛宕山愛宕大権現といった位置づけであっただろう。

だが、神仏分離令が発布されるや、白雲寺をはじめとする神宮寺は軒並み廃寺処分になり、愛宕大権現は「愛宕神社」と名称を変えた。同時に、送り火も中止になった。

お寺の仏具で四条大橋建設

奈良のお寺といえば、東大寺や興福寺、薬師寺や唐招提寺などいくつか思い出しますが、京都のお寺といえば、何寺をイメージしますか？

観光客が殺到する金閣寺、銀閣寺、清水寺でしょうか？桜の見事な醍醐寺、仁和寺でしょうか？紅葉の見事な東福寺、永観堂、天龍寺でしょうか？お庭の見事な竜安寺、大徳寺でしょうか？

では、神社はどうでしょうか？桓武天皇が祀られている平安神宮(ここは歴史は新しい)、菅原道真が祀られている北野天満宮、鳥居がたくさんあって外国人にも人気のある伏見稻荷大社でしょうか？京都に古くからある上賀茂神社や下賀茂神社でしょうか？

私は何といても**八坂神社**です。私が一番多く訪れている神社は、何を隠そう八坂神社です。阪急の四条河原町(駅名は「京都河原町」に変更)からまっすぐ東に向かっていくと、八坂さんの朱色の建物(西楼門)が目飛び込んできます。

四条河原町から八坂神社に向かうと、必ず通るのが**四条大橋**です。実はこの四条大橋が「**廃仏毀釈**」によってできたものなんです。

そのあたりのことを『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』で見てみましょう。

八坂神社の社家記録によれば、**四条大橋は1142(永治2)年、住人たちからの勧進(寄付)によって架けられた**。以来、900年近く、四条大橋は京都の東西を結ぶ交通の要衝として機能してきた。数々の歴史を刻んできたこの**四条大橋は、江戸時代までは木造の橋であった**。

明治に入って、文明開化の名のもとに、京都最初の鉄橋として架設される計画が立てられる。その際の材料にされたのが、おりしも廃仏毀釈によって壊された寺院の**仏具類**だった。京都において、仏閣は伝統文化そのものであり、観光の源泉とも言える存在であるはずだが、当時は新しい町づくりばかりが優先され、**仏教寺院が犠牲になったのである**。

四条大橋の仮設事業の総工費は1万6830円。1873(明治)6年に起工、翌年の3月には開通するというスピード工事だった。**四条大橋の整備は京都の近代化政策の柱の一つに位置付けられていた**。

明治の初め、衰退する京都を何とか近代化させようと様々な政策がとられていきますが、**四条大橋を鉄橋にする政策もその目玉の一つだったんですね**。

では、四条大橋を鉄橋にするために、原料となる鉄など金属はどこから用意したのですし

ようか？続きを見ていきましょう。

四條大橋架橋工事のために仏具類を供出された事例としては、伏見区にある日蓮宗宝塔寺が犠牲になったとの記録がある。供出されたのは大鰐口（わにぐち）だった。大鰐口とは仏前参拝の折に、紐を引いて打ち鳴らす大きな鐘のこと。神社の場合は鈴だが、寺院では大鰐口という仏具である。

宝塔寺の大鰐口は慶長年間に寄進されたもので、16貫8000匁（約63 kg）もあったという。この宝塔寺の大鰐口をはじめ、市内の寺院からの様々な金属製の什器類が供出され、溶かされて橋の材料にされていった。

一方で、四條大橋の南に架けられていた五条大橋もまた、廃仏毀釈の影響を多分に受けた。五条大橋は弁慶と牛若丸が出逢い、一戦を交えた逸話でも有名だ。洛中から清水寺への参詣や伏見桃山城と禁裏とを結ぶ京の要路として機能した。

現在、五条大橋を眺めると高欄には立派な擬宝珠（ぎぼし）が並び、荘厳な景観を作り出している。擬宝珠とは、橋や寺院の欄干などの飾りとして付けられている金属装飾である。見た目は葱坊主のようであることから、「葱台（そうだい）」とも呼ばれる。

五条大橋の擬宝珠に刻まれた最も古い年号を見ると、1645（正保2）年の鑄造のものがある。この擬宝珠もまた1868（明治元）年に、「仏教的」ということで、ことごとく撤去され、売却されてしまった。記録によれば、ある好事家は、手に入れた擬宝珠を自庭において鑑賞したという。あろうこと五条大橋は、当局によって洋風のペンキで塗り替えられ、京都の風情を一変させた。

さすがにこの蛮行を京都人は黙っておらず、当局に対して非難の声が高まったという。その結果、次の架け替えの時に元の姿に戻すことを前提に、擬宝珠の買い戻しがなされた。そして1877（明治10）年に旧観に戻したというが、2基が不明となってしまった。もとは16基つけられていたというが、現在、欄干に取り付けられている擬宝珠は14基である。

上記のことを、五条大橋に行く機会があれば確認してみようと思っているのですが、なかなかその機会が訪れません。あなたも、行く機会があれば是非ともチェックしてください。

八坂神社も北野天満宮もお寺だった

私が一番多く訪れている神社が八坂神社だといいましたが、現在住んでいるのが吉祥院天満宮の近くです。したがって、毎年元旦には初詣にお参りしているので、もうしばらくしたら八坂神社を抜いて吉祥院天満宮が一番になると思います。

吉祥院「天満宮」ですから、その本社は北野天満宮です。大きな鳥居があります。梅園があるし、お土居は紅葉の名所でもあります。何といても「学問・受験の神様」ですよ。

私が一番多く訪れている八坂神社にしても、北野天満宮にしても、今は「神社」です。でも、昔は神社ではなく「お寺」だったのです。

「お寺」であった八坂神社や北野天満宮が、どのようにして「神社」になったのでしょうか？そのあたりのことを『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』で、長くな

りますが見ていきましょう。

1868（慶応4）年3月28日、神仏判然令が出されると、まず榎村（榎村正直第2代京都府知事）が着手したのが、神仏習合していた祇園社感神院（かんじんいん）の再編であった。祇園社感神院とは、毎年7月の祇園祭でも知られる現在の八坂神社のことである。

祇園社感神院は、元は興福寺の末寺であったが、後に天台宗の勃興とともに延暦寺の別院となった。1864（元治元）年に編纂された『花洛名勝図会』を見れば、祇園社感神院境内は、本殿を中心として、多数の寺院建築物が点在しているのが確認でき、典型的な神仏習合型寺社であったことがわかる。

1868（慶応4）年5月30日、神祇官達によって神号の変更が命じられ、名称は「八坂神社」と改められた。「祇園社」との神社の名称部分だけでも存続できなかったのは、インドにおける釈迦由来の聖地、「祇園精舎」に似ているからという理由である。

祇園社感神院ではそれまで本地仏が薬師如来である「牛頭天王（ごずてんのう）」を祭神として祀っていたが、以降、御法度になった。この薬師如来、観音堂にあった十一面観音立像、夜叉神明王立像は五条の大蓮寺に移され、現在でも同時に祀られている。また、鳥居にかけられていた小野道風筆の「感神院」の扁額がおろされた。同時に奉仕していた社僧8人が還俗となった。

「学問の神様」「天神さん」の愛称で市民から親しまれている北野天満宮も、神仏分離のターゲットにされた神社であった。

北野天満宮は太宰府で没した菅原道真を祭神とし、947（天曆元）年に開かれた。境内には、松梅院、徳勝院、妙蔵院など40以上の寺院が存在し、天台宗の社僧が奉仕した。本殿内陣にはかつて十一面観音が鎮座しており、社僧が読経にいそしんでいた。拝殿の正面には大鯨口がぶら下がっていた。

だが、神仏分離令が公布されるや、北野天満宮の名称は「北野神社」と改称された。そして、境内の神建築物が壊された。多くの経典が収められていた輪蔵は撤去され、収蔵されていた一切経は近隣の干本釈迦堂にうつされたという。

二層からなる多宝塔は実に立派なものだったが、解体され、その部材は売却されて四散した。塔内には大日如来像が納められていて、こちらも散逸の危機にあったが、天満宮から約300メートル東側の浄土宗親縁寺の檀家総代が天満宮の社僧と懇意であったことから、同寺に引き取られて遷座することになった。親縁寺の本尊阿弥陀如来が祀られている須弥壇も、天満宮の多宝塔にあったもの。その証拠に須弥壇の金具を見れば、北野天満宮の神紋である「梅鉢紋」が配されているのが確認できる。・・・・・・・・

北野天満宮には鐘楼もあり、それは豊臣秀頼が寄進したものと伝えられる、同時代を代表する名建築だった。しかし、寺町四条にあった浄土宗大雲院に100両で売却、移設された。ちなみにこの鐘楼に吊るされた梵鐘は、祇園社感神院にあったものが廃仏毀釈によって下され、移されたものだ。こうして、北野天満宮にあった仏具、什物はことごとく破壊されるか、売却されるに至ったのである。

珍しいことだが廃仏毀釈に遭う前、北野天満宮本殿には、神社であるにも関わらず仏舍利が安置されていた。この仏舍利は菅原道真が天台座主から譲り受けたものと伝えられている。道真が常に襟に引っ掛けて持ち歩いていたことから、「菅公御襟懸守護の仏舍利」とも呼ばれていた。

しかし、いくらありがたい釈迦の遺骨といえども、新政府の神仏分離の方針に抗って、祭られ続けることはできなかった。天満宮から仏教色が一掃されつつあった1869（明治2）年11月、京都・北方の山寺、常照皇寺の住職櫓山が、仏舎利の撤去の噂を聞きつけて下山する。そして北野天満宮の宮司に面会し、七日間にわたって、仏舎利の譲渡を交渉したという。結果的には常照皇寺側が北野天満宮に対して、250両（現在の価格に換算すると約3250万円）という大金を寄付することで、仏舎利を手に入れた。

八坂神社はもともと祇園社感神院という神仏習合の「お寺」でした。北野天満宮も北野神社と名前を変えられる前までは、神仏習合の「お寺」でした。

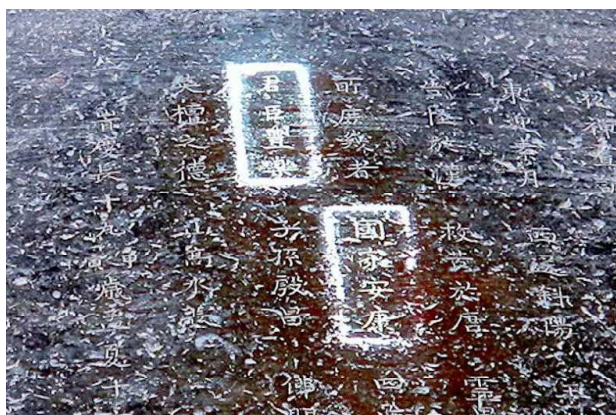
さらに、八幡の石清水八幡宮や京都伏見稲荷大社などの神社でも、同様の破壊行為や改称が行われていきました。名称が変更された有名な寺社をいくつか列挙してみましょう。

石清水八幡宮 → → → 「男山神社」
愛宕大権現 → → → 「愛宕神社」
金毘羅大権現（象頭山金光院松尾寺） → → → 「金刀比羅宮」
竹生島弁財天妙覚寺 → → → 「都久須麻神社」
多武峰妙楽寺 → → → 「談山神社」

また、豊臣秀吉が造った方広寺では鐘楼が壊され、鐘が野ざらしになりました。ほかにも、深草の即成就院などが打ち壊され、廃寺の憂き目に遭っています。

ここで、質問です。方広寺の鐘といえば、大坂の陣のきっかけとなったある文字が刻まれていることは有名ですね。では、何という文字が刻まれているのでしょうか？漢字4文字の2つの言葉を教えてください。

そう、答えは「**国家安康**」と「**君臣豊楽**」です。



方広寺の鐘銘

「神仏分離」「廃仏毀釈」により寺院や仏像が破壊されたり、廃寺・廃仏がされたりしただけではありませんでした。実は、この頃新たな神社が作られていきます。例えば下記の「神社」が新たに作られました。

- ★楠木正成を祀る「**湊川神社**」
- ★崇徳上皇を祀る「**白峰宮**」
- ★後鳥羽上皇・土御門上皇・順徳上皇を祀る「**水無瀬神社**」
- ★国事で斃（たお）れた英霊を祀る「**東京招魂社**」（現在の**靖国神社**）

東京招魂社は明治2年（1869年）に東京九段に作られ、明治8年（1875年）には国事で斃れたすべての霊を祀ることが決まり、明治9（1876年）年に「靖国神社」と改称されました。

また、天皇が歴史上初めて伊勢神宮を参拝しました。これは大きな変化ですし、天照大神信仰と天皇が「現人神」であるとするシナリオが動き出したということになります。

廃仏毀釈を主導したのは榎村府知事

さて、京都における一連の廃仏毀釈を主導したのは誰だったのでしょうか？

それは当時**大参事であった榎村正直第2代京都府知事**でした。実は京都において、榎村正直は**明治初期の衰退した京都の立て直しに尽力した立役者**として高い評価を受けています。ですが、**同時に廃仏毀釈を推進させ、京都の伝統を壊す**ということもやっていました。

榎村正直は長州出身で、初代知事長谷信篤の時代に副知事に相当する大参事として実務を取り仕切るようになっていました。彼は、「京都の功労者」という輝かしい面と、「京都の伝統破壊者」という暗い面がある人物です。

1864（元治元）年の長州藩が引き起こした禁門の変、1868（慶応10）年の鳥羽伏見の戦いから始まる戊辰戦争。これら一連の内乱によって京都の街の多くが、焼き払われてしまいました。

そして、京都に決定的なダメージを与えたのが東京遷都でした。幕末は政治の舞台が江戸から京都に移っていました。大政奉還が行われたのも京都二条城でした。

ところが、明治新**政府内部から遷都論が噴出**します。**日本を近代国家にしていくためには、殖産興業・富国強兵を推し進めていかなければなりません。**しかし、狭い京都では新規開拓の余地は限られていました。それに対し、幕府が不在になった江戸の町を都として開発していく方が未来志向であり、現実的であると考えたのです。

江戸城無血開城で主人不在となった江戸城に、当時17歳の明治天皇が入城したのが1868（明治元）年10月13日のことでした。

ここで質問です。江戸城の無血開城といえ、旧幕府方と新政府側のトップが会談し、江戸城を無血で開城することは有名です。江戸城や江戸の町を壊滅させないこと、徳川慶喜の命を助けることなどで合意しました。

それでは、**この会談を行い江戸城無血開城を実現させた二人の名前を教えてください。旧幕府方と新政府方を、一人ずつ教えてください。**

旧幕府方が勝海舟、新政府方が西郷隆盛でしたね。

さて、明治天皇が京都に戻ってこないことがわかると、京都の町から公家や商人が江戸へ江戸へと大移動していきました。京都市には当時の人口は35万人いたそうですが、一気に20万人まで激減します。特に、御所の公家町は廃墟になりました。



京都御所内にある
西園寺邸跡の碑

1877（明治10）年に明治天皇が還幸した際、あまりの荒れ具合に嘆き、御所の再整備を命じます。現在の京都御所が形作られたのは、この時のことでした。

『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』で続きを確認しましょう。

こうして「千年の京都」は終焉した。そして同時に、「新しい京都」の模索が始まった。その先導になったのが榎村であった。

1870（明治3）年、榎村は復興策でもある「京都府施政大綱」をまとめ上げる。・・・

こうした施策に基づき、榎村は以下のような具体的な政策を実現させている。

1869（明治2）年 **小学校の開設（新政府による学制頒布よりも3年前倒し）**

1871（明治4）年 **京都博覧会の開催、博覧会の余興として「都をどり」を考案**

1872（明治5）年 **新京極通の造成、女紅場（によこば、女子の教育機関）の開設**

突然ですが、日本で最初の小学校は何県に設立されたのでしょうか？都道府県名で教えてください。また、日本で最初の中学校は何県に設立されたのでしょうか？都道府県名で教えてください。

小学校も中学校も京都府でしたね。

明治政府は1872年（明治5年）に日本初の近代的な学校制度を定めて（これを「**学制**」といいます）、全国に小学校・中学校・大学校を設置することにしました。目的は、一言でいえば「**国民皆学**」です。身分や男女に関係なく、国民すべてに学ぶ機会を確保しようと考えたのです。

ところが、です。京都では、1869年（明治2年）5月21日に小学校が開校されている

のです。私の言いたいことがわかりますか？

学制は1872年、京都市で小学校ができたのが1869年です。つまり、このことが画期的なのは、国よりも3年も先に京都では民間が動いて小学校が建てられたということです。民間人がお金を出しあって、国より先に2つの小学校を開校させたのです。

京都府は寺子屋に代わる新しい教育施設を「町組ごとに創設する」計画を立てました。その施設は町組会所としても使用し、建設の費用は住民が負担するという仕組みでした。各町組には番号を付したことから**番組小学校**と呼ばれます。

斜陽化する京都、その京都を支え、近代化させていくには人材が必要であると考えた京都の町衆が、教育の重要性を強く考え、自らお金を出しあって小学校を開校させたのです。

その小学校ですが、「**上京第二十七番組小学校**」と「**下京第十四番組小学校**」の2校です。そして同年に、京都市では**64校の小学校が開校**しています。

なお、上京第二十七番組小学校の跡地には**現在京都御池中学校**がたっています。上京第二十七番組小学校→柳池小学校→柳池中学校→京都御池中学校と、名前が変わってきたのですね。

ちなみに、5月21日は日本最初の近代小学校が開校したことから、「小学校開校の日」となっています。

1870（明治3）年には京都府中学校が誕生します。**京都府立京都第一中学校**、つまり**現在の洛北高等学校**ですね。

『仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか』で確認しましょう。

京都の廃仏毀釈の動きの特徴として、他地域に比べてかなり開始時期が早いことがあげられる。それは王政復古の大号令、祭政一致、神祇官の再興の布告、神仏分離令などが、ここ京都に置かれた新政府にて発布されたからという地政学上の理由もあっただろう。

また、榎村が生粋の京都人ではなく、長州人であったことも、廃仏毀釈の度合いを強めた原因だったと推測出来よう。「余所者」である榎村には、新しい京都のまちづくりのためには、古き伝統を壊していくことへの躊躇（ちゅうちょ）がなかったと思われる。

それまで京都に縁のなかった人物が、千年の都に引導を渡しました。廃仏毀釈の嵐が吹き荒れている中で、大蛇を振るったのですね。確かに、昔から京都にいる人だったら、いろいろな所にしがらみがありますから、変えたくても変えられないことがあります。でも、榎村京都府知事にはそのようなものがなかったから遠慮会釈なく断行できたのですね。

今回もお読みいただき、ありがとうございます。